

# 農業×IT

## 進む実証実験

農業にIT（情報技術）を活用する実証実験が、青森県南の若手農家の間で進められている。専用アプリケーション（アプリ）を使い、農作業の進捗や作物の生育を記録する試み。データの蓄積が進めば、作業効率や収益率の向上につながる可能性を秘めている。技術的には発展途上だが、農業経営の在り方に変化をもたらすのか注目される。（岩淵修平）

### 県南若手農家と八戸企業

タブレット端末で農業用アプリを使うアイティワークの岡本信也さん（左）と、沼畑俊吉さん

11月20日、南部町



### 農作業や生育状況

## データ蓄積 効率化へ

20日、鶏舎やハウスが並ぶ南部町相内の農場。アプリを使う農家の一人、沼畑俊吉さん（四）がスマートフォンでミニトマトを撮影すると、液晶画面には画像とともに、周辺の温度や湿度、照度などの気象データが映し出された。

「アプリレポーター」と名付けられたアプリは、八戸市のIT企業「アイティワーク」が開発した。農業用アプリの実用化に向け、青森県が2014年度から2カ年で進める事業の一環。昨年は開発に向けて県や企業、農業者が意見交換し、11月からは両市町の農家5人が実際に現場で活用している。

農地や作物を撮影すると、近くの携帯電話基地局か、敷地内のセンサーが捉えた気象データを自動で添付。音声識別機能で、作業内容はその場で録音できる。気象データや画像、音声はアプリに保存され、いつでも確認できる。

沼畑さんは「まだ始まったばかりだが、何年後かに、作業や生育状況をデータ

を下げようになる」と期待感を示す。

これとは別に、勤怠管理システムも導入した。スタッフがタブレット端末を操作し、どの作業にどれくらいの時間がかかっているかを記録。作物別の作業量が分かり、正確なコストの把握に生かせる。

農家が勤や経験を頼りにしているのが現状。データに基づいた農業への転換を図り、省力化やノウハウの蓄積、新規就農の拡大につながる狙いがある。使いやすさやコスト面で課題はあるものの、肥料の購入や作物の出荷を一元管理したり、離れた農地にいるスタッフ

農家の構築も進んでいる。アイティワークの岡本信也取締役は「実証実験現場の声を聞き、より使いやすいものに改善していきたい。ITで、地域の農家が抱える課題を解決する伝いができたら」と強調。さらなる機能の充実に努める考えだ。